

2020年度日本数学会出版賞受賞者のことば

神保 道夫 氏 『量子群とヤン・バクスター方程式』
(丸善出版, 2012年; シュプリンガー, 1990年初版)

全く思いがけないことで驚きました。

30年前, このテーマで本を書くというお誘いをいただいたとき, 本を書くということの重みも深く考えずにお引き受けしてしまいました。この分野が始まって間もない頃で, 自分に理解できていないことも多々あったのですが, 量子群についての本格的な書物はいずれ専門家の手で書かれるだろうから, それまでの橋渡しになれば, と考えたのです。実際にその後量子群のよい教科書がいくつも世に現れ, 日本語では谷崎俊之さんの名著がでています。拙著の内容はあちこちのトピックをつまみ食的に紹介しただけで, これらの体系的な著作と比べるべくもありません。ロシア人の友人が「教科書と言うよりパンフレットのようだ」と評したのは的を射ていたと思います。

こうした「お手軽さ」を初学者へのとりつきやすさとして今回評価していただいたのかも知れません。それにしてももう少し分かりやすくできたのではなかったか, と恥ずかしく感じますが, 役割を終えて久しいと思っていましたが, その後も読み継いで下さった読者があつたとすればありがたいことです。

最後になりましたが, ご推薦いただいた方に深くお礼申し上げます。

神保 道夫
立教大学理学部特任教授

* * * * *

富永 星 氏

このたびは, 2020年度日本数学会出版賞を賜り, まことに光栄に存じます。中学時代に参加した遠山啓さんの市民講座で, 「無限と連続」を扱う数学の切れ味のみごとさに触れて, 数学はじつに奥深く面白いものだと感じたことを, 今もはっきり覚えております。その後「面白くない数学」にも遭遇し, 受験の振り分けのための無味乾燥な「試験紙」(1970年代の数学は, 部外者にそう思われていました)とされている数学の本来の魅力を広く伝えるお手伝いできれば, と考えるようになりました。中等教育の教員, 翻訳業と役割こそ変りましたが, その思いは今も変わっておりません。一般向けの数学啓蒙書の翻訳は, 数学を「理解すること」への憧れはあつても数式のセ

ンスに欠け、言語学に浮気しかけた前歴がある人間にとって、ニッチな天職のような気がいたしております。

書き手の意図の正確な把握こそが翻訳の土台であるはずなのに、海外の数学者たちの言葉と向き合うたびに、自分のなかの数学像、数学者像の貧弱さを痛感させられる。そんな折りに、日本数学会も支援している藤原耕二氏（京都大学）のプロジェクト“**Journalist in Residence**”を知り、さまざまな大学の数学者の方々にざっくばらんなお話を伺うことができました。拙訳の幅や質が少しでもましになっているとすれば、それはひとえに関係者の皆様方のおかげと、深く感謝いたしております。

翻訳という作業では、原著者の考えや思いをできるかぎり正確に読み取り、さらにそれを的確で読みやすい日本語にすることが重要で、浅薄なオリジナリティは邪魔者でしかない。どこまでいっても黒子である訳者をこのように取り上げていただけたことは、望外の喜びです。これを励みとして、数学の魅力、威力、人間くさを広く知ってもらえるよう、さらに海外の作品を紹介してゆきたいと思っておりますので、今後とも、どうぞよろしく願いいたします。ほんとうに、ありがとうございました。

富永 星
翻訳業

* * * * *

山本 義隆 氏 『小数と対数の発見』（日本評論社、2018年）

私は予備校で物理学を教えるかたわら、科学思想史のようなものに首を突っ込んできました。そしてある時、近代科学は何故そして如何に西欧に生まれたのかという問いこそが科学史の基本問題であることに思い至り、以来、その問題に取り組んできました。三部作『磁力と重力の発見』『一六世紀文化革命』『世界の見方の転換』（みすず書房）はその問いに対する私なりの回答であり、小著『小数の対数の発見』（日本評論社）はその副産物として三部作を補完し、もとの問題への回答を完結させるものであります。

古代以来、宇宙についての学には、論証の学である哲学としての宇宙論の他に、観測天文学が存在していました。アリストテレス宇宙論とプトレマイオス天文学です。両者はよくひとまとめに語られますが、実は別のものです。この古代天文学は、主要には占星術のためのものではあれ、現代から見れば定量的な観測にもとづく仮説検証型の学問として、哲学的宇宙論より優れていると思われれます。しかし当時は、絶対確

実と思われる第一原理から間違ふことのない論証によって展開される哲学的自然学としての宇宙論こそが真理であるとして上位に置かれ、人為的で過ちの避けられない観測にもとづき事物の本性に触れることのない数学に依拠した技術的な天文学は下位に置かれていたのです。

近代科学は、この序列を転倒することで生まれました。古代宇宙論の誤りを明らかにし太陽中心の世界像へと至る近代天文学の発展は、観測と計算にもとづく天文学が上位に置かれてゆく過程、つまり学的序列の下剋上だったのです。そしてこの過程で、本来的に連続量である観測量の扱いのための数学が、もっぱら自然数に依拠する形而上学的な数論より重視されるに至ったのです。

こうして数直線上の点で表される実数の発見から、連続量としての実数を任意の精度で近似し得る小数の形成、それにもとづく対数の創出へと発展し、ここに近代科学にとって不可欠な解析学誕生への基盤が生まれたのです。小数と対数の発見は、数と量の科学における転換点であり、近代解析学の始点なのです。

ともあれ、私の『小数と対数の発見』が数学の世界でそれなりの評価されたことは、大変嬉しく思っています。

山本 義隆
駿台予備学校物理科講師